

教案**子どもとつむぐ物語：遠足から始まった電車あそび****目次**

対象となる子ども.....	1
目標.....	1
活動実施上の基本方針.....	2
活動の構造.....	3
全体の概要（おおまかな流れ）：.....	4
1回目.....	4
2回目・3回目.....	7
バリエーション例.....	8
年間カリキュラムを作らない実践の進め方　ー子どもたちとつくる保育をめざしてー.....	9

■ 対象となる子ども

年齢	3歳から4歳の幼児（→1歳から小学生まで可）
人数	2人以上
経験・知識	活動に必須の経験や知識は特になし
日本語力の目安	特になし。日本語力は問わない ・ 実際の実践は、日本語が第1言語の幼児、第2言語・家庭内言語の幼児、外国語である幼児の混合クラスで実施

■ 目標

目的	子どもたちが他者とのかかわりを通して、思いやりや協力しあう力を育む （子どもたちの社会性を育む）
目標	・ 仲間を思いやり、順番を守ったり、安全に気をつけながら、電車ごっこをみんなで楽しむ ・ 友だちと関わりながら、役割を分担したり協力したりして遊ぶ
言語面の目標	・ 電車に関係する日本語の語彙やオノマトペに触れる。繰り返したり使ってみたりしてもよい ・ 自分の使える言語を用いて、電車に乗ったり、見たりした経験を共有したり、電車ごっこを楽しむためのアイデアを言ったりする

■ 活動実施上の基本方針

(1) 子どものペースで、子どもも大人も一緒に考え、一緒に学ぶ

幼児期において、「しなければならないこと」は何もないと考えています。遊びや生活を通して、さまざまな経験を重ねる中で総合的な力を育み、学校での学びにつながる期待感を育てていきたいと考えています。

(2) 他と比べない

子どもたちは一人ひとりが違っており、人と比べることに意味はないと考えています。みんなと同じようにできることが、子どもの幸せにつながるとは限りません。集団で過ごす中で、それぞれが「できたこと」や「挑戦したこと」を「すてきだね」と認め合い、「やったね」と喜び合うことを大切にしています。

(3) 教室で見せる姿がすべてではない 教室でできたことだけを評価しない

教室は刺激が多く、活動に参加していないように見える子どももいます。しかし、そうした子どもも、じっと観察しながら何かを学び取っているかもしれません。また、家庭などの安心できる場所で、園での経験を「復習」するように表現することもあります。そうした姿を大切にしたいと考え、ご家庭との対話を重視しています。

(4) 日本語だけを学ぶ時間にしない

日本語を話すように無理に促したり、矯正したりすることはしていません。子どもたちの頭の中では、「日本語」と「ほかの言語」が混ざり合っていて当然だと考えています。母語で考えたことや、体を動かした経験など、すべてが日本語の力につながっていきます。楽しい活動の中で、自然に日本語が生まれてくるように、次の(5)に示すような方法で働きかけています。

(5) 実践を通して、子どもに伝えたいことばを意識する

どの言語を話す子どもにも分かるよう、指示や説明は短くし、絵や写真、実物、手本を見せながら行っています。使う単語や表現はできるだけ統一し、繰り返し使うようにしています。それらのことばが子どもからすぐに出てこなくても、無理に引き出すことはしません。

(6) 毎回の活動は、同じ流れで行う

どれだけ小さい子どもであっても、活動の見通しを持つことは大切です。時計が読めなくても、「次に何があるか」を知っていると安心し、無理をしすぎて疲れたりしないように自分で出す力を調整しながら過ごすことができます。また、同じ流れで活動を行うことで、繰り返し使われる日本語の意味を推測することにもつながります。本実践では、「始まりの挨拶→月の歌→絵本の読み聞かせ→活動→まとめと終わりの挨拶」という流れで30分の活動を行いました。

■ 活動の構造

30分×3回

実践例として、3歳児を対象に行った活動をご紹介します。

※ 違う年齢の子ども向けに実施する場合のバリエーション例は、[こちら](#) (p.8) に示しています。

子どもたちの遊びの中で自然に生まれた活動の後半部分(図の赤で囲った部分)を記録しました。



※ 子どもたちとつくる保育を目指した「年間カリキュラムを作らない実践の進め方」は、[こちら](#) (p.9) に詳しく記載しています。

【1回目目の前の心の動き】

遠足	● 遠足に行った公園で使われていない線路を見つけた ● 線路の上をみんなで列になって歩いた子どもたち
外遊び	● 大縄や小さいサッカーのゴールをつないでみんなで一列で歩いている姿

【1回目】

絵本・紙芝居	● 電車に関連する絵本、紙芝居の読み聞かせ ● 線路を歩いた経験や電車にのった経験などを子どもたちと話す
歌う	● 電車ごっこ遊びをしながら駅をまわる ● 「線路は続くよどこまでも」の歌を歌いながら遊ぶ

【2回目・3回目】

駅に名前をつける	● みんなで相談しながら駅に名前をつけ、駅の看板を作る
電車ごっこ遊び	● 電車ごっこ遊びをしながら駅をまわる

■ 全体の概要(大まかな流れ):

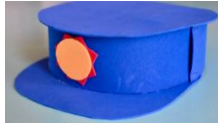
次の言葉を、実践を通して繰り返したり、子どもたちが耳にしたりする機会をできるだけ多くする。

- ・ 読み聞かせて使用した絵本に出てくる言葉(絵本例『でんしゃでいこう でんしゃでかえろう』ひさかたチャイルド、『せんろはつづく』金の星社、『ながーい でんしゃ』至光社)
- ・ 電車に関する言葉(電車／駅／線路／車掌さん／お客さん／～駅に着きました／発車します。ご注意ください／すみません、降ります)
- ・ 電車に関するオノマトペ(ガタンゴトン、キキー)
- ・ 歌『線路は続くよどこまでも』

- ・ 子どもたちの興味・関心を日本語につなぐ手立てをするための、「**伝えたい言葉の選び方**」は、[こちら](#)(p.10)をご参照ください。

1回目

時間	活動内容	備考
	【準備】 教室内に駅の絵を貼り、線路を準備しておく。 年齢や人数に合わせて線路の長さを調節する。 	・ 場所が広かったり線路が長すぎたりすると幼児期の子どもたちは走り出したくなってしまうことがある。
5分	1. 保育室に貼られた線路を見て、経験を想起する <u>保育者の声かけの例:</u> T:・・・ S:先生これ何? S:(線路の上をぐるぐる回りだす) T:何してるの?楽しそう! S:電車なの! T:でんしゃ! S:Choo Choo! T:でんしゃ!	・ 保育者は日本語のみで活動を進めたが、子どもたちの発言はどの言語でも受け止める。 ・ どの言語を話す子にも分かるように、指示や説明は短い言葉で、必ず絵や写真、実物、手本を見せながら行う。 ・ 使う言葉はできる限り統一し、繰り返し使う。

10 分	2. 絵本『でんしゃでいこう・でんしゃでかえろう』、『せんろはつづく』や紙芝居『でんしゃがくるよ』などの読み聞かせを聞き、電車に乗ったり見たりした経験を想起する。  保育者の声かけの例： ※経験を共有するための発問は母語でも良い T: 先生電車の本持ってるよ! 読んでみる? T: でんしゃ、電車に乗ったことがある人? S: あるよ、はやぶさの靴下持ってるもん。 T: 日本の電車とメキシコの電車って同じ? 違う?(写真を見せる) (実施地区は貨物電車が一般的で人はあまり乗れない) S: 遠足で線路があって、年長さんと歩いた。 T: ここ、せんろ。線路だね。	・絵本を読む前に「はじまるよ」「コンコンきつね」などの手遊びをすると自然と視線が保育者に集まり静かに話を聞く姿勢になる。 【絵本を読む理由とポイント】 ・日本語の本なら、どんな本でも必ず学ぶべき語彙や文法が入っている。 ・絵本を使うと絵でストーリーが把握しやすい。 ・絵本を読むことで心が落ち着く。 ・毎回活動の前に同じ本を繰り返し読み聞かせすることで、ストーリーやそこに出てくる語彙に親しむことができる。 ・読み聞かせて出てきた語彙や表現は活動の中繰り返し、子どもたちがその使い方を理解できるようにする。 ・低年齢の子どもたちは保育者の周りに集まると本の世界に入り込みやすくなる。
15 分	3. 「線路は続くよどこまでも」の歌に合わせて線路を歩く 保育者の声かけの例： T: さっきみんなで線路、せ・ん・ろ、のところを歩いて楽しかったね。(線路を指差し、歩くふり、笑顔で「楽しい」を表現し意味が伝わるようにする) 電車の歌があるけど歌ってみる?(ピアノのところに移動し、歌だとわかるように) S: (保育者のピアノに合わせて自然と線路をぐるぐると回りだす)	・低年齢の場合は電車に見立てたもの(テープ、段ボール電車、フラフープ等)があった方が一列に並ぶことが意識しやすく安全に遊べる。 ・それまでバラバラに走り回るようにしていた子どもたちに、みんなで遊ぶともっと楽しいことを伝える。
	4. 保育室に貼られた駅の看板に気づき電車遊びに興味をもつ。 保育者の声かけの例： T: (保育者は車掌の帽子をかぶり電車に見立てたもの<大縄、フラフープ、段ボールなど>を持って) 見て! 車掌さん、しゃしょう、のぼうしです。 S: やりたい! S: 帽子貸して! T: 車掌、しゃしょうのせんせいです。電車に乗るお客さんはいますか?(手を挙げて全体を見渡し、手を挙げるとがわかるようにする) S: やりたい!	・車掌の帽子やブレザーがあるとやりたいという気持ちがさらに膨らむ。 

5. 「線路は続くよどこまでも」の歌に合わせて
電車ごっこ遊びをする。子どもの様子を見ながら、
複数回繰り返す。



歌 1 回目：

- (1) 子どもたちは車掌（保育者）の後ろに一列に並ぶ。
- (2) 「出発進行！」の言葉を合図に「線路は続くよどこまでも」のピアノが始まったら先頭の保育者に続き線路に沿って歌いながら歩く。ピアノが止まったら保育者は「次止まります」と言って次の駅に停車したら「着きました」と言う。乗客は好きな駅で降りたり乗ったりし始める。
- (3) 電車に乗った経験を想起したり、伝え合ったりして、電車が停車する前にはアナウンスがあると安全であることに気づく
- (4) 安全運転を守るのは車掌さんの大切な仕事であることを確認する。

保育者の声かけの例：

S: Aくんが急に止まったから危なかったよ。
ゆっくり歩いてほしい。
T: 電車が急ブレーキしたみたいだったね。
S: 電車は安全運転なんだよ。
S: 早く車掌さんになりたい。

- (5) 駅に着いたら先頭を車掌、乗客をお客さんと呼ぶことを話し合い、列の前から2番目に並んでいる子どもに車掌を交代する。

歌 2 回目：

- (1) 「線路は続くよどこまでも」のピアノが始まったら先頭の保育者に続き線路に沿って歌いながら歩く。
- (2) 2番目に並んでいる子どもに車掌を交代し車掌になったら「車掌の〇〇です」と自己紹介する。

- ・ 歌が終わるタイミングで駅に着けるように演奏のペースを調整する。
- ・ 子どもたちは歌えても歌えていなくてもいい。間違っても歌っていてもいいし、好きな部分や耳で拾えた部分だけ歌っていてもいい。子どもたちは保育者の歌声に安心するし、少しずつ言葉と意味がつながる部分が増えることがある。
- ・ 回数を重ねるごとにルールが分かるようになり、楽しい遊びだと気づく子もいる。参加しつづけない子はピアノの横に座ったり、みんなの様子を眺めたりしてかまわない。



- ・ けんかになってもかまわない。安全に遊ぶにはどうすればいいのか、保育者は子どもたちと一緒に考える。大きな事故につながると判断した場合は介入する。
- ・ すでに関係ができているクラスの場合は「次の車掌さんは誰かな？」と尋ね、互いに名前を呼び合えるようにしてもいい。人数が多い場合は電車を何台かに分けたり、「線路は続くよどこまでも」の伴奏のスピードを速めたり緩めたりしてもいいが、スピードを早めても安全運転を守ることを伝える。

	歌 3 回目以降： 一回ごとに車掌を交代して続ける。できるだけたくさん の子どもが車掌になれるようにする。	
--	--	--

2回目・3回目

時間	活動内容	備考
	【準備】 駅のイラストを教室の壁に貼っておく。	
5 分	1. 駅には名前があることを思い出す。 保育者の声かけの例： T: (指を指しながら) これ、なんだろう？ S: 駅だよ！ T: え・き？え・き・・・駅ってなに？ S: 電車に乗るところ。 S: 僕〇〇駅に住んでたの。 T: (電車になりきって) 止まりまーす。ここ、どこだ っけ？ S: 駅！ T: え・き！え・きに止まりまーす S: 駅！(数回繰り返し、「駅」を理解する) T: みんなでえ・き、駅を作ってみる？	新しく導入する言葉はやり取りの中 で繰り返し言ったり聞いたりして印 象に残るように意識する。
5分	2. 絵本『でんしゃでいこう・でんしゃでかえろう』、『せん ろはつづく』や紙芝居『でんしゃがくるよ』等の読み聞か せを聞き、駅について話し合う。 保育者の声かけの例： T: 駅ってどんなのか見てみようか。この間の本に 載っているかな？(写真や絵を見せながら、何 度も「えき、駅」と繰り返し言う。子どもたちの顔 を見渡ししながら「駅」と言うことで印象付けたい。)	本実践では1回目と同じ本を繰り返 し読み聞かせた。幼児期の子ども たちは同じ本を何度も読んでもら うことで安心し、内容をよりよく理解 することができる。
25 分	3. 駅を作る。 保育者の声かけの例： S: お花駅がいい、いっぱいお花があるの！ S: 先生、リス描いて！ S: 「り」ってどう書くの？ T: ひらがな表で見てみる？ S: 私が書いてあげる！ S: (先生が書いてくれたら真似できるかも)	- 子どもたちが好きな形で駅を作れ るように画材を用意する。一人で作 っても複数で作ってもいい。 - 駅の名前をひらがなで書きたいと いう気持ちを促すため、ひらがな表 を用意しておく。 2回目で完成しない場合は延長す る。
15 分	4. 作った駅を並べて電車ごっこ遊びをする。 S: 車掌さんになったら僕の作った恐竜駅で 停車したい！	

■ バリエーション例

1～3歳児

1歳9か月ごろから大人の真似事を楽しむようになり、2歳半ごろから見立て遊びができるようになります。

- ・ダンボールに紐をつけた電車を人数分用意し、お客さんに見立てた好きな動物を好きな駅まで連れて行く。「乗ってください」「着きました」など、車掌さんになりきって言えると楽しい。
- ・牛乳パックで電車を作り歌に合わせて電車を動かす。グループで歌に合わせて歩くだけでも楽しい。
- ・大きい積み木に子どもが乗り、輪投げの輪などをハンドル代わりにして持つ。保育者は「乗せてください」と言い、後ろにつく。
- ・あらかじめ切っておいたいろいろな色のビニールテープを床に並べて貼る。「つなげてつなげて」「長くしようね」と声をかける。完成したら、線をたどりながら電車ごっこをする。

4～5歳児

3歳ごろからごっこ遊びが長続きするようになります。5歳ごろからは、ごっこ遊びの役割が盛んになり、約束やルールを次第に守りながら、友だちと遊べるようになります。

- ・保育者や保護者が駅長として駅に待機し、駅に着いたら車掌は駅長とじゃんけんをする。勝ったら車掌のままで、負けたら待合室へ。
- ・大きい積み木（牛乳パックに新聞紙を詰めたものも可）を一行に並べ、列車に見立てる。先頭が運転手になり「シュシュッポッポ」と声をそろえたり、「右に曲がります」と体を同じ方向に倒したりして楽しむ。
- ・絵本『ながーいでんしゃ』を紹介し、保育室いっぱいに広げたロール紙に、みんなで線路を描く。友だちと線をつなげることを意識しながら、筆やローラーで長い線を2本描き、その間にしましま（まくら木）を描く。できたら電車ごっこをしてもよいし、ダイナミックに線路の上を走ったり、ジャンプして越えたりして遊ぶ。線を描くときに「ぐーっ、ぐーっ」「しま、しま」など声に出してみるのも楽しい。「もっとながーくしよう」と声をかけることで、「長い」という言葉も印象に残る。

小学生

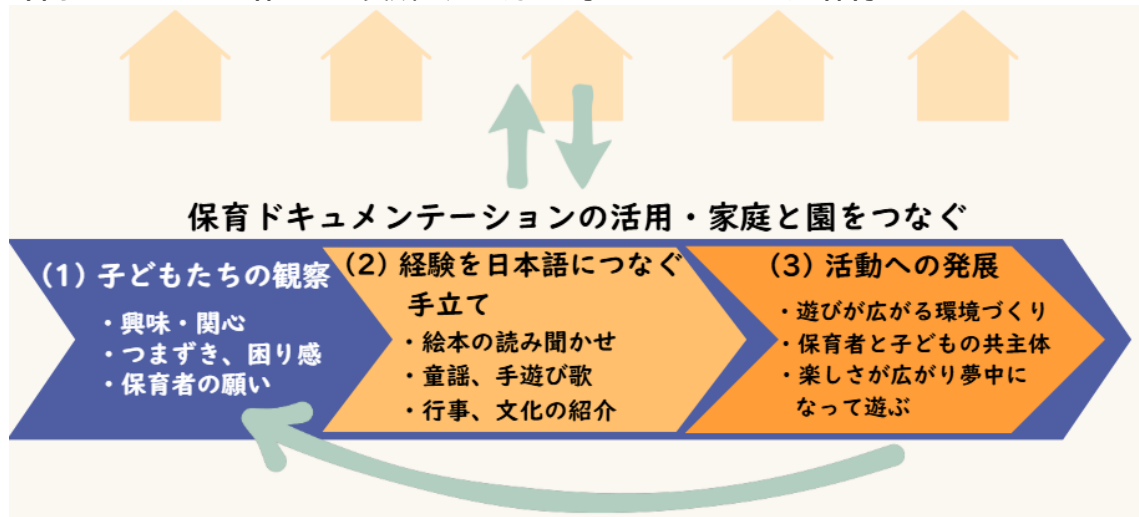
- ・電車グループ、線路グループ、駅グループに分かれ、廃材を活用して、大きな町とそこを走る電車を作る。
- ・小さいクラスの子どもや家族を電車ごっこに招待する。招待状を書いたり、駅でクイズを出したり、スタンプラリーにしたりするイベントを計画してもよい。

みんな(全年齢)

- ・活動のつながりや、「日本語のじかん」のまとめ、お楽しみとしてこの活動を取り入れてもよい。その日に扱ったフラッシュカードを駅に貼り、保育者の「次の電車は〇〇行きです」という呼びかけに応じ、歌が止まったらその駅で止まるようにする。



■ 年間カリキュラムを作らない実践の進め方 ―子どもたちとつくる保育をめざして―



基本的に以下の(1)～(3)を行き来しながら、実践を進めています。この一連の流れに、あらかじめ決められた時間や順番はありません。子どもたちの様子を丁寧に観察しながら、一緒に活動に取り組み、その中で「どんな問いかけができるか」「どんな課題に挑戦できるか」を考えていきます。

活動の過程では、保育者は子どもたちの様子を観察し続け、成長している姿を見取り、その様子を保育ドキュメンテーションに記録します。(※保育ドキュメンテーションについては、[こちら](#) (PDF)  をご覧ください。)

(1) 子どもたちの観察

保育者は、子どもたちと毎日一緒に過ごしています。自由遊びの時間に、子どもたちがどんなことに興味を持っているのか、何を話し、何をしたいと思っているのかをよく観察しています。園での姿だけからは見えないことを、保護者やきょうだいを含む家族との何気ないやりとりの中から教えてもらうことも多くあります。

(2) 経験を日本語につなぐ手立て

子どもたちが興味を持っていることに合わせて、担任と相談しながら教室の環境を整えています。絵本を揃えたり、気づきにつながりそうなおもちゃや制作の材料を用意したりしています。本園での「日本語のじかん」は、学年ごとに一斉に行うため、クラスの多くの子どもが関心を持っているテーマに関する、日本語の歌や手遊び、絵本を紹介することから活動を始めています。

(3) 活動への発展

保育者の働きかけに応じて対話が生まれ、これまでの経験や興味・関心が次々と子どもたちから出てきます。そのやりとりの中から子どもたちの思いを拾い集め、大切にしながら、活動を一緒につくっていきます。保育者が「このような流れで進めよう」と考えていた内容と異なることを、子どもが希望したり、強い興味を示したりする場合には、そちらに方向転換しています。

一方で、活動の中で「このことも知ってほしい」と大人の視点で感じたことを取り入れる場合もありますが、今は必要ないと判断したときには、無理に続けることはしません。子どもたちはまだ経験が少なく、主体性が育つ途中にあるため、周囲への配慮が難しい場面もあります。そうしたときは、世界のルールを少しよく知っている大人として、危険なことや納得できないことについて説明し、子どもと一緒に考えています。

この(1)～(3)の取り組みを繰り返しながら、子どもたちの姿から次の活動の「種」を見つけ、提案していきます。活動どうしのつながりが見えにくいと感じることや、前の活動でできたことが次の活動ではうまくいかなかったように見えることもあります。子どもたちは螺旋階段を登るように成長していく存在です。その過程を大切に見守っています。

■ 「伝えたい言葉」の選び方

子どもたちの興味・関心を日本語につなぐために、私たちは活動の中で「伝えたい言葉」を意識するようにしています。一つの活動の流れの中で、繰り返して使いたい語彙や表現を、あらかじめ 5～10 個考え、保育者同士で共有しています。活動中も確認できるよう、目につくところに大きくメモしておくこともあります。

一回の活動は 30 分と短いため、指示や説明に使う言葉はできるだけシンプルにし、「今日はこの言葉を伝えたい」という軸をもって関わるようにしています。特に伝えたい言葉については、ゆっくり言ったり、子どもたちの顔を見渡ししながら、自然な形で繰り返したりすることも心がけています。

また、子どもたちの発言や行動に応答する場面でも「『ガタンゴトン、ガタンゴトン』って言ってるんだね。はやい電車なのかな?」というように、子どもの言葉を受け止めながら、意識して使うことがあります。子どもたちは、友だちの発言や、それに対する保育者の反応を、とてもよく聞いています。

伝えたい言葉は、繰り返し読む絵本の中から選ぶことが多く、似た言葉が使われている手遊び歌があれば、それも活動に取り入れています。手遊び歌は、同じ歌詞を繰り返し、動作と言葉が結びつきやすいため、子どもの記憶に残りやすいと感じています。たとえば本実践では、「でんでんでんしゃ」の手遊びを用い、子どもたちが揃うまでの時間や、活動後の少し余白のある時間にも歌うことで、無理のないかたちで言葉に触れる機会を重ねています。

設定について細かい基準はありませんが、子どもたちの発達段階や活動の内容に合ったものにします。子どもたちから生まれた流行り言葉もすくいあげながら、**みんなで日本語を伝え合うのを楽しめること**を一番大切にしています。